

V 職業意識

1 職業継続意識

職業継続についての意識を、結婚・出産との関係、職場移動との関係、看護職としての職業継続の3点について尋ねた〈統計表第149～154表〉。

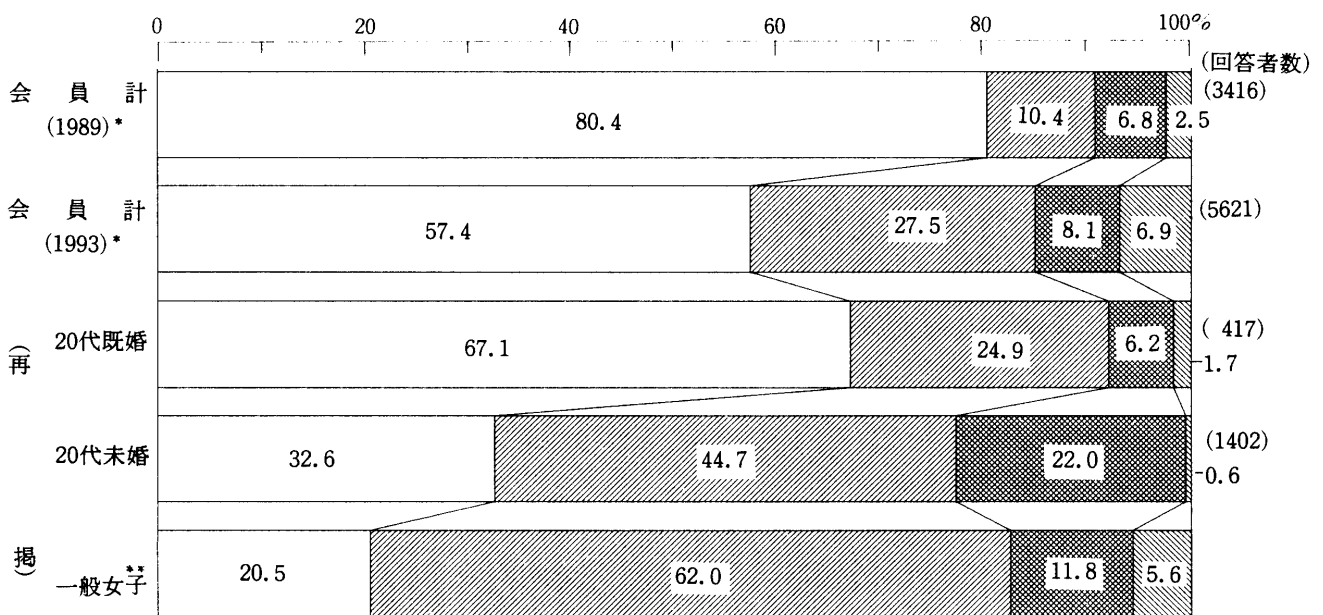
(1) 職場継続と結婚・出産

職業継続と結婚・出産をめぐる意識との関係を示したのが、〈図15〉である。

「結婚・出産にかかわらず働きたい」と回答している者は57.4%で、89年調査の80.4%と比較して減少しているが、一般女子に比べてもまだ職業継続の意識は高い。しかしながら、20代の未婚者では89年調査では51.8%が働きたいと回答していたのが、今回の調査では32.6%に減り、一般女子の意識に近づいている。

(2) 職場継続と職場移動

図15 職業継続意識（離職中の者および勤務形態無回答を除く）



なるべく働きたい
 結婚・出産で一時退職し再就業
 結婚・出産まで働く
 その他・不明

* () 内の数字は調査年次

** 一般女子：内閣総理大臣官房広報室「女性の就業に関する世論調査」(1989(平成元年)年)より。「一般的に望ましい女性の就業のあり方」についてのフルタイム女子雇用者の回答

離職中の者および勤務形態無回答を除いた会員全体で、「なるべく一つの勤め先で仕事を続けたい」者が66.4%、「自分にあった職場を探して勤め先を変える」者が29.1%である〈統計表第149表〉。

年齢別にみると、20代前半の回答者では、「なるべく一つの勤め先で仕事を続けたい」者が55.7%、「自分にあった職場を探して勤め先を変える」者が43.3%と両者の回答が拮抗している。20代後半以降では、「なるべく一つの勤め先で仕事を続けたい」が6割以上を超えている〈統計表第149表〉。

(3) 看護職としての仕事の継続

離職中の者および勤務形態無回答を除いた会員全体で、「看護職として仕事を続けたい」者が49.5%、「仕事の内容に自分の受けた看護の教育・資格・経験が生かせるなら、職種にこだわらない」者が41.1%、「看護職以外の仕事をしたい」者が6.2%である〈統計表第149表〉。

年齢別にみると、「看護職として仕事を続けたい」者の比率は、20代前半の40.9%から、年齢が高くなるにつれて増加する傾向がある〈統計表第149表〉。逆に、「看護職以外の仕事をしたい」と回答している者は、20代前半の10.6%をピークに、年齢が高くなるにつれて減少する。

20代前半の会員の職業継続意識は、一般の女子よりもまだ高いといえるが、しかしながら、急速に一般の女子に近づいてきているといえよう。

2 現在の仕事に対する満足度

現在の仕事に対して「非常に満足している」者が1.7%、「満足している」者が35.1%、「どちらでもない」者が44.4%、「不満である」者が15.1%、「非常に不満である」者が2.6%である〈統計

表第155表〉。

職位別に見ると「非管理職」「中間管理職」「管理職」の順に満足度が高くなる〈統計表第157表〉。

職業継続意識と現在の仕事に対する満足度の関係をみると、「結婚・出産まで働く」「自分にあった職場を探して勤め先を変える」「看護職以外の仕事がしたい」と回答している者での満足度が低い〈統計表第161表〉。

3 現在の仕事の領域

現在の仕事の領域としては、「臨床（急性期）」が46.4%、「臨床（慢性期）」が42.2%、「地域」が10.0%、「管理」が23.2%、「教育・研究」が5.4%である〈統計表第162表〉。

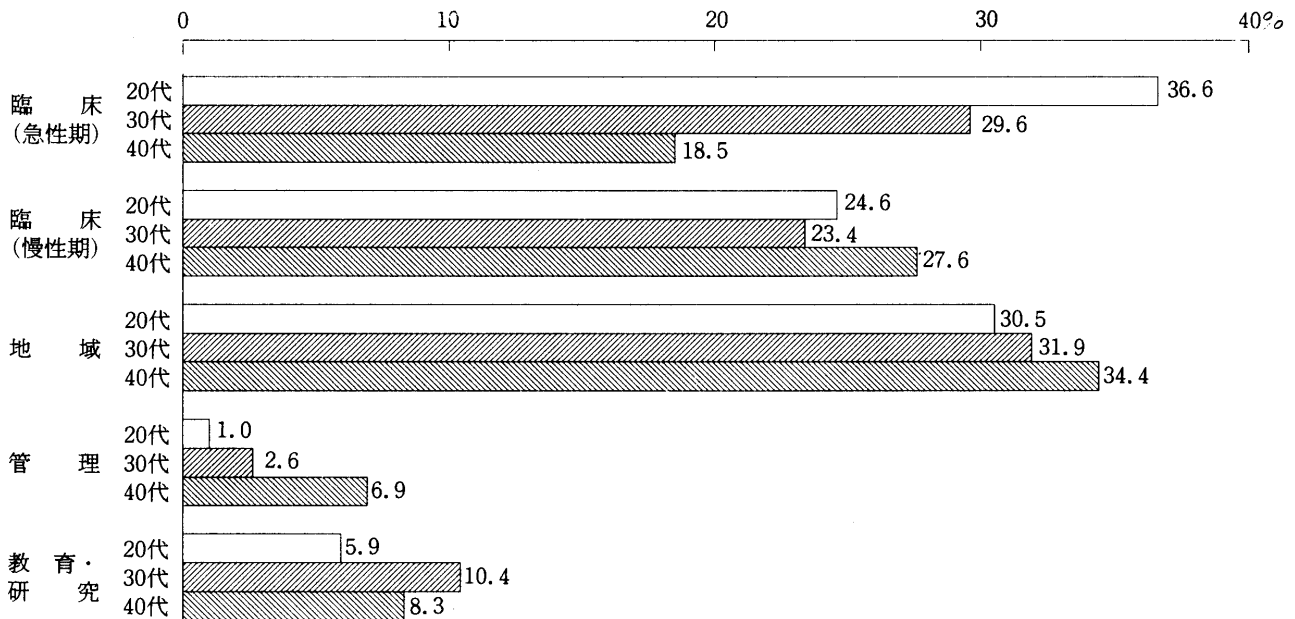
4 今後どんな領域で自分を生かしたいか

年代別に今後自分を生かしたい領域について示したのが、〈図16〉である。

今後自分を生かしたい領域として「臨床（急性期）」を選んでいる者の比率は、20代が最も高く、30代、40代になるにつれて比率が減少する。その逆に「地域」や「管理」を選んでいる者の比率は、20代が最も低く、30代、40代になるにつれて比率が高くなる。「臨床（慢性期）」を選んでいる者の比率は30代が最も低く、「教育・研究」を選んでいる者の比率は30代が最も高い。

勤務場所別にみると、現在「病院」に勤務する者では、「臨床（急性期）」が30.9%、「地域」が27.9%、「臨床（慢性期）」が27.7%などの順に選んでいる〈統計表第166表〉。「保健所」と「市町村役場」の勤務者では、「地域」（それぞれ82.8%、87.1%）を選んでいる者が極めて多い。「看護教育機関」の勤務者では、「教育・研究」を選んでいる者が46.7%と最も多いが、その他、「地域」

図16 今後どんな領域で自分を生かしたいか (年代別)



を選んでいる者が28.6%、「臨床（慢性期）」を選んでいる者が14.8%である。

「看護系大学」の卒業生では、「地域」が38.3%、「教育・研究」が29.8%、「臨床（急性期）」が19.1%、「臨床期（慢性期）」が10.6%などの順に選んでおり、「教育・研究」を選んでいる者の割合が他の学校の卒業生に比べて多い（統計表第167表）。

5 働いてみたい分野

「老人看護」「在宅ケア」「精神科看護」「福祉関係」の4つの分野で働いてみたいかを尋ねた。その結果、「老人看護」で働いてみたい者が29.3%、「在宅ケア」で働いてみたい者が43.3%、「精神科看護」で働いてみたい者が12.2%、「福祉関係」で働いてみたい者が40.2%である。また、現在就業中の者は、「老人看護」で11.7%、「在宅ケア」で3.7%、「精神科看護」で4.1%、「福祉関係」で2.4%である（統計表第168表）。

年代別に、「働いてみたい」と思う4つの分野

の比率を示したのが、〈図17〉である。

「在宅ケア」「福祉関係」で働いてみたい者の比率は、どの年代も4割以上ある。また、「老人看護」で働いてみたい者の比率も、各年代で3割前後いる。「精神科看護」で働いてみたい者は、各年代で1割以上いる。

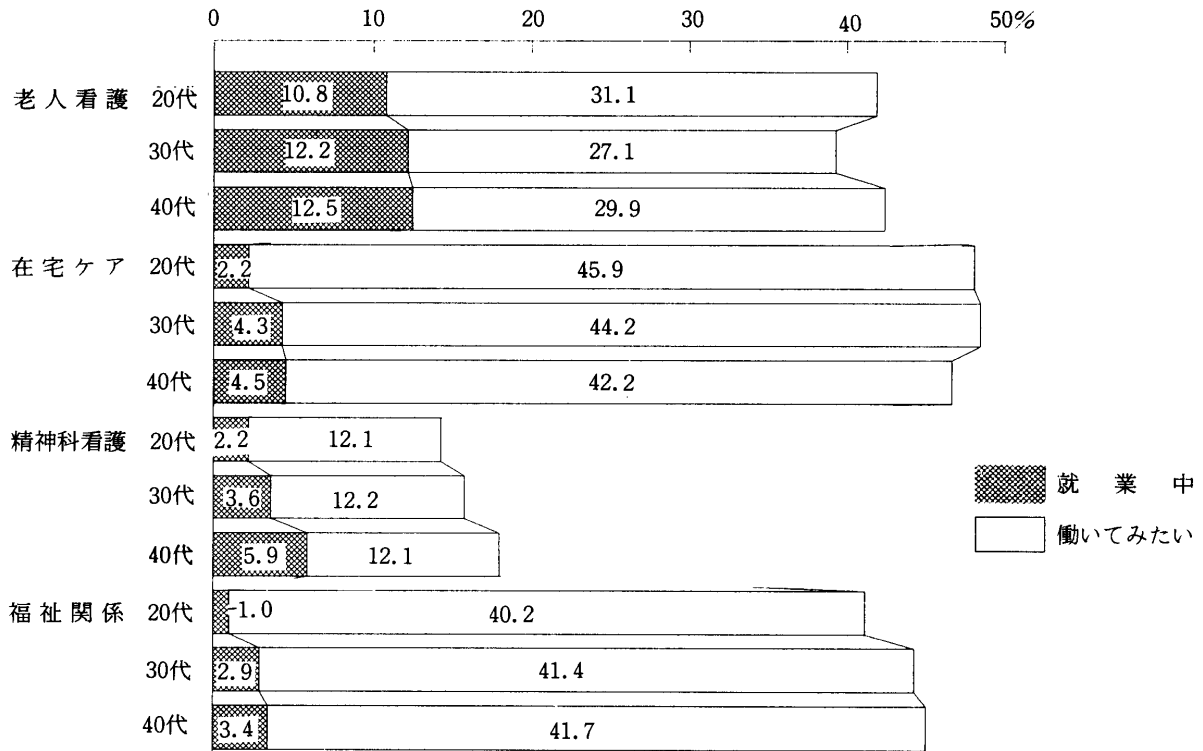
勤務場所別をみると、「病院」と「看護教育機関」の勤務者では、「在宅ケア」の分野で働いてみたい者が最も多く、それぞれ43.8%、60.4%である。また、「保健所」と「市町村役場」の勤務者では、「福祉関係」の分野で働いてみたい者が最も多く、それぞれ43.4%、41.4%である（統計表第171表）。

専門学歴別にみると、「看護系大学」の卒業生では、他の学校の卒業生よりも、4分野で働いてみたい者の比率が高い（統計表第172表）。

6 自分に向いている領域は

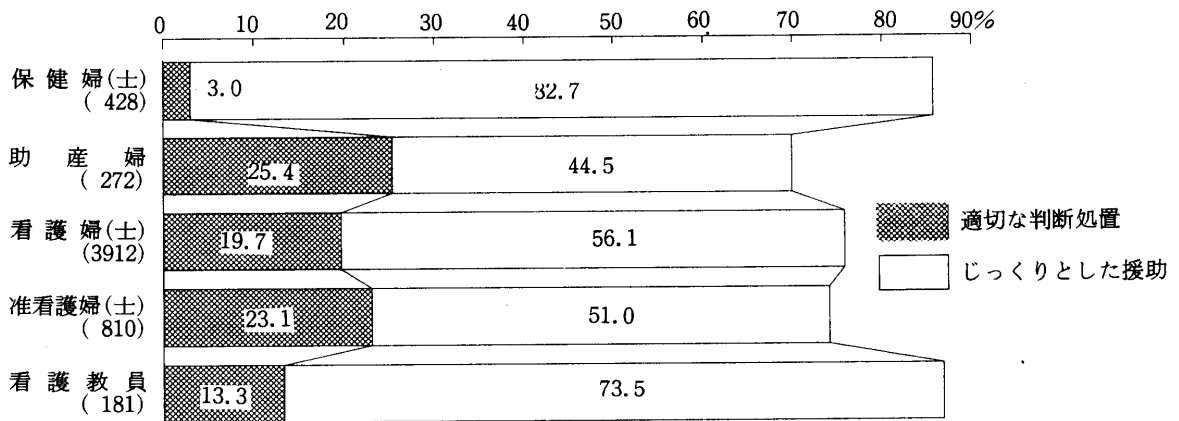
自分に向いているのは、「一刻をあらそう場合

図17 働いてみたい分野 (年代別)



(注) 各年代の回答者は、20代：1856名、30代：1717名、40代：1402名

図18 自分に向いている領域は (業務別：離職中の者および勤務形態回答を除く)



(注) () 内の数字は回答者数

に適切な判断処置をすること」(これ以降、「適切な判断処置」という)と「患者が自分の健康問題に立ち向かえるようにじっくり援助すること」(これ以降、「じっくりとした援助」という)のど

ちらの領域かを尋ねた。その結果、「適切な判断処置」を選んだ者が18.9%、「じっくりとした援助」を選んだ者が57.5%、「どちらでもない」者が22.7%である(統計表第173表)。

業務別にみると、「適切な判断処置」を選んだ者の比率は、「助産婦」25.4%、「看護婦（士）」23.1%などの順に多い。また、「じっくりとした援助」を選んだ者の比率は、「保健婦（士）」82.7%、「看護教員」73.5%などの順に多い〈図18〉。

年齢別、勤務場所別、専門学歴別などを問わず、「適切な判断処置」よりも「じっくりとした援助」を選んでいる者の比率が高い〈統計表第173～176表〉。

7 スペシャリスト志向か、ジェネラリスト志向か

「特定分野を極め、深めたい」（これ以降、「スペシャリスト志向」という）と「特定分野にこだわらないで、幅広く対応できるようになりたい」（これ以降、「ジェネラリスト志向」）のうち、自分に近い方を選んでもらった。その結果、「スペシャリスト志向」の者が30.3%、「ジェネラリスト志向」の者が58.4%、「どちらでもない」者が10.3%である〈統計表第177表〉。

業務別にみると、「ジェネラリスト志向」を選

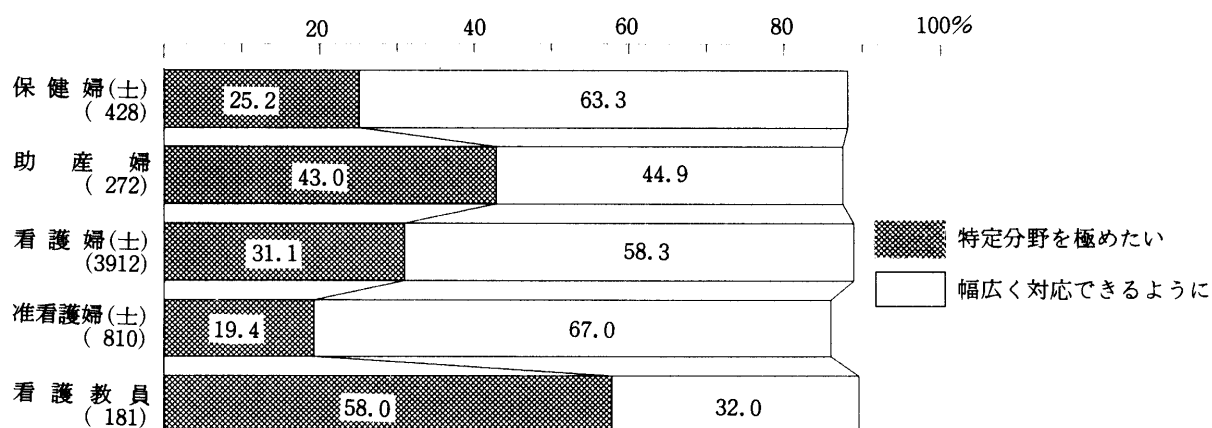
んだ者の比率は、「准看護婦（士）」67.0%、「保健婦（士）」63.3%、「看護婦（士）」58.3%などの順に多い。「スペシャリスト志向」を選んだ者の比率は、「看護教員」58.0%、「助産婦」43.0%などの順に多い〈図19〉。

年齢別では、どの年齢層でも「ジェネラリスト志向」を選んでいる者の比率が高い〈統計表第177表〉。

以上より、職業意識を概括してみると、20代、特に20代未婚の職業意識が、大きく変化してきたようである。一言でいうならば、一般女子の意識に近づいてきたといえよう。看護職としていろいろな価値観をもった人たちが働き始めたといえるのかもしれない。

また、今後臨床以外の領域や分野でも、働いてみたいという者が少なくない。現在、そのような領域や分野の多くは、看護職の確保が困難でありながら、今後急速に需要の拡大が予想されている。職場の労働条件などの改善が進めば、これらの分野での看護職の確保は可能になるといえよう。

図19 スペシャリスト志向か、ジェネラリスト志向か（業務別：離職中の者および勤務形態無回答を除く）



(注) () 内の数字は回答者数